

卓球王国

1

JANUARY
2024
VOL.320

world-tt.com
880 YEN



田中佑汰 切り拓く力。

YUTA TANAKA

「巻頭インタビュー」

目指せ最強の2人
THE ダブルス「後編」

松下大星 ペン進化論

「グッズ企画」
現代ラケットの2大選択肢
インナー VS アウター

「技術特集」
無理なく、ミスなく、得点に導く
田中佑汰の
チャンスメイク・カウンター

河田正也
セカンドキャリア
全日本社会人
全日本学生
全日本力デット
全日本団体
かごしま国体
全国ラージボール

セカンドキャリア。
選手たちのその後

2nd

Second career.
They were the players.

vol. 1

「元全日本2位」 糀谷博和

インタビュー=今野昇
interview by Noboru Konno
写真提供
糀谷社会保険労務士事務所 (p.71)



「選手のみなさん。あなたが思っている以上に、
厳しい卓球での生活が
将来の人生に必ず活きます」

■ こうじたに・ひろかず 1971年8月6日生まれ、大阪府出身。小学4年で卓球と出合う。中学の時に全国中学校大会に出るも全国的に無名だったが、上宮高1年の時に全日本ジュニアで3位、3年時にインターハイ2位。早稲田大に進み、4年時の1993年全日本選手権で2位。卒業後、びわこ銀行に入り、2000年の全日本選手権で現役を引退。現在、糀谷社会保険労務士事務所の代表、株式会社陽転の社長を務め、滋賀県を中心に全国に顧客を持ち活動する

青春時代、卓球にすべてを捧げ、日本のトップを目指した選手たち。彼らはラケットを置いた後にどんな人生を歩み、セカンドキャリアを重ねるのか。ひとり目に紹介するのは糀谷博和。生まれつき右手に障がいを持ちながらも、反骨精神と努力、そして明晰な頭脳で日本の頂点に近づき、そして卓球界を去った男。引退から20年、社労士（社会保険労務士）として成功する糀谷を支える原動力は「卓球選手としての経験のすべて」と語る。

右手の障がい

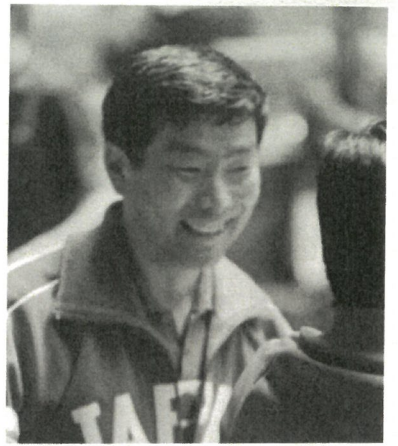
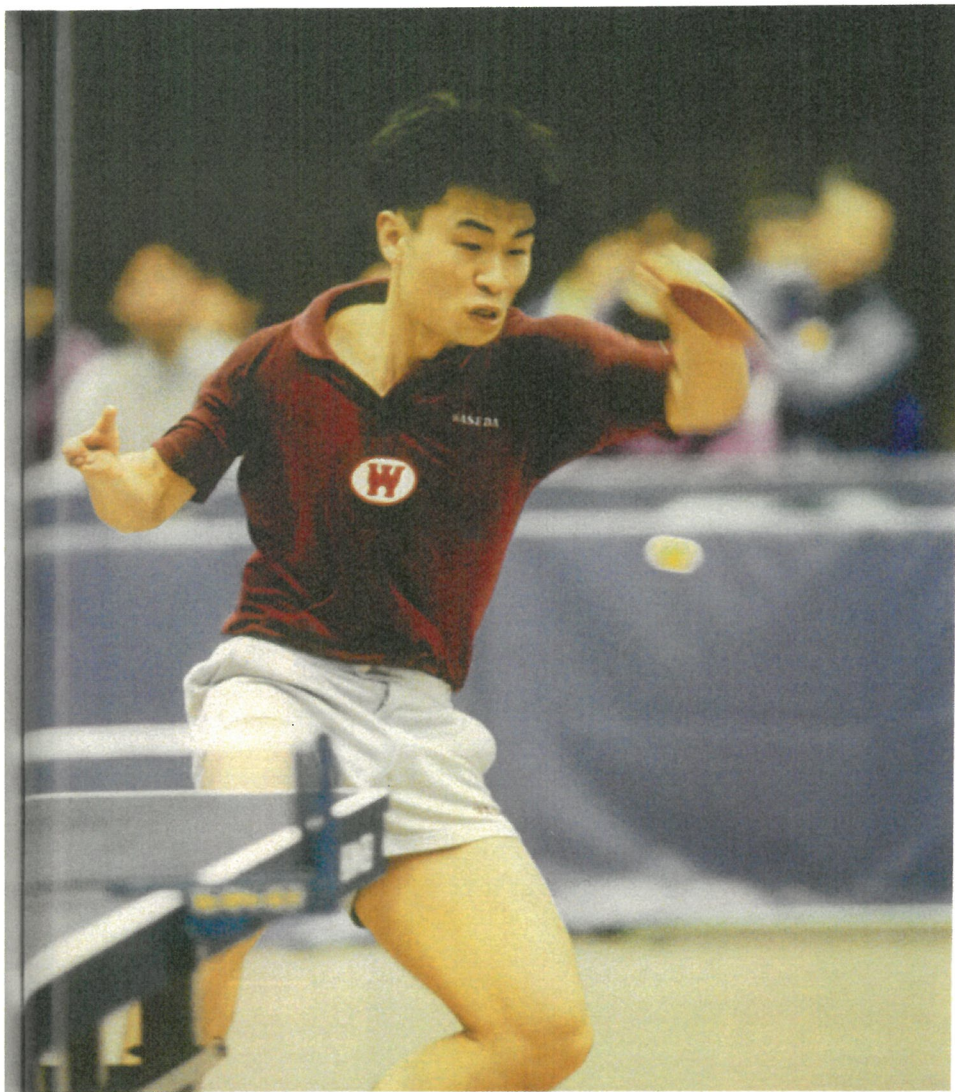
「普通の仕事ができるのか」と悩む。
そして、強烈な指導者、田中拓との出会い

大阪市平野区に生まれた糀谷博和。生まれつき右手4指欠損という障がいを持ち、小さい頃はイジメにもあった。父も病気で車椅子生活だったため、家計は母が支えていた。

小学4年で卓球と出合うまでは野球少年だったけど、右手の指がないので野球を断念。卓球なら左手一本でできるし、おもしろかった。ほくの中には健常者に対する反骨精神があった。

中学の時に田中拓（元上宮高総監督、元全日本女子監督／故人）先生のところに来てもらったのは、ぼくが通っていた長居障がい者スポーツセンター（大阪）にいた方だった。「この子を障がい者スポーツの中心だけで育ててはだめだ」と考えて、田中先生のところに来てもらった。そして、上六卓球センターで会ったんです。

ぼくの足りない部分を埋めてくれるのはこの人だと直感的にわかった。ぼくの人生の中で「こんな大人見



●1993年の全日本選手権で決勝に進んだ糀谷博和(左)。中学時代に強烈なカリスマ指導者、田中拓(上・故人)との出会いがなければ、今の自分はないという。今でも机の引き出しを開けると田中の写真が自分を叱咤(しつた)する

たことがない」というオーラを持っていた。上六で会う田中先生は怖くなかったけど、中学の時、上宮高に練習に行ったらとんでもなく怖かった。ビビって帰りました。「この前と違いますやん」と(笑)。

それで上宮に進んだら河野正和先生もいた。あとで気づいたことだけど、普通の名門校は指導者はひとりだけど、上宮は当時二人いたので休憩ができなかった(笑)。当時の上宮はわざと田中派と河野派を作り、競争させる。ぼくは最後の田中派だった。今は絶対だめだけど、当時、ボコボコに殴られていた。

TSPトピックス(専門誌)の「TALK」というインタビューページでスピードスケートの黒岩彰さんが

登場して、「スポーツの世界であるレベルまで行った人は、他の世界でもそこまでは行ける」と書いてあって、中学生の時にその言葉に勇気づけられた。ぼくは右手に障がいがあったから将来が不安だったけど「卓球をやっていいんだ」と思えた。

物心ついた時から父は筋ジストロフィーという病気で車椅子の生活。父は家で内職していたけど、ぼくは右手の障がいですれさえもできないし、母は内職したものを玄関まで運んでいたけど、それも手伝えないと気づいていた。ぼくは幼稚園の頃から普通の仕事ができるのかという不安があった

た。頭が良くて医者になったとしても手術できないし、物作りもできないことに気づいていた。子ども心にこの仕事はできるけど、この仕事はできないというように分けていたんですよ。

田中先生には障がい者云々ではなく、逆の意味の特別扱いとして一番殴られた(笑)。今思えば、こいつは反骨精神もあるし、殴つてもやる気をなくさないと思つたのかな。卓球が強くて勉強もできているから、普通はおだてるでしょ。ところが、ぼくを殴るとチームはピシッとする。母は小学校に入る時に、「この子を普通に扱ってください」と校長先生に言いに行ったけど、ぼくは田中先生が自分を普通に扱ってくれることに気づいていた。それはもちろん、河野先生も。

上宮高に入学する時に、ぼくはスポーツコースではなく普通科の進学クラスで、入試では2番入った。担任の先生は、卓球ではなく勉強で大学に行ったほうが良いんじゃないかとずっと言ってくれていた。

父は身体的にも普通ではなかったので、田中先生や河野先生に「父性」を見ていたのかもしれないですね。一般の人が見る父親像ですね。

びわこ銀行に入り、 1998年の国体優勝で肩の荷が下りて、 銀行を辞める

中学時代に田中拓と出会い、全国中学校大会には出たが、全国的には無名。しかし、上宮高に入ると急激に力をつけた糀谷は1年の全日本ジュニアで3位、3年でインターハイ2位(高校の後輩の森本洋治に敗れる)、国体優勝という成績を残し、早稲田大に進んだ。

2

Second career.
They were the players.

中学校で大阪の予選を通るかどうかという選手が、高校1年の時に全日本ジュニアで3位に入った。田中卓也(埼玉大深谷高)に勝って小笠原剛士(東山高)に負けた。田中先生がベンチに入ると、魔法にかかるとですよ。「オレがベンチに入ったら5点は違うぞ」とか、「次、フォアに来るから目つぶって打て」とか。本当にフォアに来るから目つぶって打っていた。高校1年だから信じていたんですよ(笑)。

当時、上宮では、毎日の練習前に1時間の講話があった。田中先生が松下幸之助とか本田宗一郎の話をする。卓球と全然関係ない話をして、努力の仕方や生き方を教えてくれて、今もそれが活かしている。

まだ将来の答えは出ていなかった。卓球が良いのか、勉強が良いのか。2年、3年で学級長にして内申点を上げるように担任の先生が配慮してくれたし、評定平均は4.5以上あった。一方、練習場に行けば、田中先生に、「おまえな、卓球をやっていたほうが将来いいぞ」と言われて、ふたりとも言っていることはバラバラだけど、嘘はついていなかった。

距離の近い人は、ぼくがメチャクチャなやつだというのとはわかってはいるけど、ぼくとの距離が少しある人は「優秀な人」と見ている。「卓球の成績も良く、勉強も良くできて、障がい乗り越えた人」というふうに見られていた。

早稲田大に入り、同期には小笠原剛士、平亮太がいる。彼らは小さい頃から強かった。彼らを見て、彼らと話をすることが自分の人生に強い影響を与えている。ある日、平と話をしていたら、彼が「別にええねんけどな」と言うんですよ。彼には「余裕」というか「バックファ」(ゆとり)があるけど、ぼくにはなかった。

大学に行って先輩を見ていたら、「早稲田の選手は、こういう会社に行けるんだな」と気づいた。大学3

年の時に卓球関係であれば、ヤマハに誘ってもらった。卓球と関係のないところではNTTの話もあった。当時は、まだしっかり考えられなくてフワフワしていた。そうしたら、平が「滋賀のびわこ銀行に行かないか」と言ってくれた。びわこ銀行にとっては、国体での優勝が悲願で、最終的にはぼくと平、川嶋崇弘(専修大)の3人が入った。母から「父が車椅子生活だから就職は関西にしてくれ」と言われていたし、当時は関西の強い実業団はあまりなかった。

入行して、銀行の研修が3カ月あった。朝のランニングから始まって夕方に役員の話で終わり、そこから練習をしていた。日本リーグのビッグトーナメントに選ばれていたの、研修初日の午後から遠征することになった。人事部のお姉さんから「試合、頑張ってくださいね」と言われた瞬間に、「あーおれどこかで銀行を辞めなあかん」と明確に思った。ポーツとして入行したけど、それからはモヤモヤ、悶々の日々。ただ卓球部に入れていただいた、そのミッションが国体優勝だったので、1998年に優勝した瞬間、肩の荷が下りたんです。

卓球をやっている時の将来への不安。 バックボーンとかじゃなくて、 卓球そのものが仕事で役に立っている

1994年にびわこ銀行に入行し、7年間の選手生活。そしてラケットを置いて、約1年間はびわこ銀行で働いた梶谷は、社労士(社会保険労務士)の国家試験に合格した。社労士とは、人事・労務管理全般に関する知識をベースに経営のアドバイスを企業に行う仕事だ。

29歳の時に卓球部廃部と聞いた時、「卓球をやめて仕事ができる」とホッとした。2000年の全日本選手権が最後の全日本だった。でも「おれはこのまま銀行の仕事がしたいんかな」と疑問が湧き、「自分には何ができるんやろ」と考えた。

まず、飲食店はできない(笑)。当時、結婚もして、本を見て、弁護士としての独立は15年かかる、司法書士も違う。数学強いから税理士かな……これは5年かかる、社会保険労務士、なんじゃこの仕事、意味わからない。でも5カ月で資格を取れて、「将来性大」と書いてあった(笑)。

単純だから「社労士目指そう」と思った。通信教育に申し込んで、東京選手権に行く前の日、3月18日に教材が届いて、その時に試験が8月にあると知った。5カ月に少し足りないから、来年にしようと思った。そうしたら、教材の底に紙が一枚入っていて、労働法の世界は法改正が激しいので、来年の試験はまたゼロから始まりますというようにことが書かれていた。

高校生の時から勉強の仕方は知っていて、本質を理解しないと卓球でもボールは入らないでしょ。勉強も丸暗記でなく、本質を理解しないと応用が効かない。社労士の勉強も本質を理解すれば暗記するのも早いんですよ。

8月に社労士の試験を受けて、翌日に、ジャージ姿で銀行の人事部に行った。「ぼく昨日、社労士の試験受けたんで、もし方が一試験受かったら、その資格を活かせる部署に異動できますか?」と聞いたら、キョトンとした顔をしている。あとでわかったのは、彼らも社労士の試験を受けて落ちていたらしい。

「卓球部のやつが通るわけじゃないやん」と思っているから、「ええよ」と言われた。「今、いいよと言いましたよね? それじゃ」と人事部をあとにした。

ぼくは解答速報を見て、自分が通るのはわかっている

た。11月に試験合格の通知が来た。誰も銀行の卓球部の人間が社労士の試験に受かるなんて思っていなかった。すぐに部長に呼ばれて、「自分の行きたい部署を言っていざ」と言われて、結局、年金相談のある業務推進部に行った。

腕に覚えがあるぞと勇んで行ったら何もわからなかった(笑)。試験と実務はこんなに違うんやとわかった。まず自分が言うことは間違えう可能性が高いからお客さんの電話番号を聞いて、相談に来た後に電話で謝りながら説明して、1週間後には完璧にできた。早く仕事が終わると、他の仕事もするようになった。今まで卓球ばかりやって仕事をしていなかったけど、やっていることはパターン認識だから卓球と同じなんですよ。

ある日、上司に「この部署はお前が仕切れ」と言われた。できると思ってたけど、このままズルズルいってしまうと感じて、辞め時だなど思った。資格を取って11カ月くらいで銀行を辞めた。30歳だった。それまで誰かにレールを引かれていたことに気づいた。銀行を辞める時に、「おまえ出世コースにいるんやで」と言われたけど、「レールのないところを歩いてみたい」と答えた。銀行でも出世というレールを引かれていた。銀行を辞めるのは、上宮に行く時の決断と一緒です。

当てもないまま、家のローンもあったし、子どもも生まれたばかりだった。自宅開業で、飛び込み営業。独立した初日、2月1日に近所のクリーニング屋に行った。いつもの兄ちゃんが来たと思っている。1時間しゃべった。「でもな、うち従業員いないんよ」と言われた。そうか社員の多いところ行かなあかんと思いい、近所を回りまくった。社会保険事務所の人が来たとか、保険の勧誘の兄ちゃんが来たと思われた(笑)。心が折れそうだった。資格学校の講師をやっていたから、多少の収入はあった。その頃、何人かの人に

「卓球の糀谷さんですか、ここで何してんですか？」と言われた。名前も珍しく、右手の障がいもあったからすぐにわかったんでしょね。

現役時代に岩崎清信(元全日本チャンピオン)さんや、他の強い人に「なんで強くなったんですか？」と聞くと、みんな「たまたまや」と言うんです。努力を重ねていくとある時に爆発するというのは脳科学の世界でもわかっているけど、卓球でも仕事でも努力を重ねていけば、ある日、それが成果として爆発すると思っていた。

独立して1年目でなんとか食べるようになっていた。飛び込み営業で仕事を取ってきて、12、13社のお客さんがついていた。「おもしろい兄ちゃんだ」とか「エネルギーもありそうだ」とか言われてね。どういふ人と会っても、田中先生よりも怖い人はいないんですよ(笑)。

現在、52歳の糀谷。独立して21年が経った。気がつけば滋賀でも有数の社労士事務所となった。自分の仕事のすべてに卓球選手としての経験が活かしている。そして、今でも現役時代の仲間たちと酒を酌み交わすことも多い。

軌道に乗ったのは独立して3年経ったあたりですかね。それで食えると思ってたけど、オレはこんなもんじゃないだろと思つて、4年目に草津に事務所を借りて、人を雇うと決めた。今は顧問先として230社のお客さんを持ち、13名のスタッフとともに日々、奮闘しています。

卓球をやっている時でも将来が不安でしかたなかった。でも卓球をやってきたことが仕事でもすべて活かしている。バックボーンとかじゃなくて、卓球そのものが仕事で役に立っている。卓球でも滋賀の中で人と人

をつないでいて、それが自分の中では卓球への恩返しだと思っている。

高校に入った時から田中先生に「相手のことを読め」とやたら言われた。卓球は心理戦だと。最初はわからなかったけど、卓球をやっているうちにわかっていった。今の仕事でも同じで、お客さんが何を求めているのかを考えている。講演でも自分が話したいことを言うのではなく、参加した人の聞きたいことを話すようにしている。

よく自身、個人競技としての独立心の強さはあるけれど、中高大でキャプテンをやつて、たくさん失敗を経験したことがメチャクチャ活きた。大学3年の春に早稲田は2部に落ちている。3年生だったけど、ぼくがキャプテンだった。同期の小笠原と平の3人とダブルス、合わせて4勝しなければ勝てない戦力だった。あの二人のどちらかが負けると負け決定みたいな雰囲気になって、その状況で負けまくっていた(笑)。キャプテンのぼくがリーダーシップを発揮できないのが悪かった。言うべきタイミングの時に言わないと痛い目に遭うことがわかった。

ぼくは社労士として講演をすることが多く、自分の体験談を企業の方の前で語るとバカ受けする。「ハラスメント」というテーマで話をしたり、キャプテンとしての実体験も「リーダーシップ」というテーマで話せる。労働法とか難しいテーマでも、卓球に置き換えて話をすると、分かりやすいようみんな話を聞いてくれる。

右手に障がいがあったことさえ役に立っているし、スポーツを一生懸命やつて良かった。今が一番良い時期なのは明確です。

20代後半で自分が何をやらたいのか、不安でしかたなかった。自分の経験からも、現役選手は卓球をやっていることが将来、どう役立つか見えないだろう

糞谷博和

KOUJITANI, Hirokazu

2nd

Second career.
They were the players.

な、とは思う。本当は怪我して苦しんだことさえもその人の将来の資産になるんです。

社会に出たら、「早く早稲田卒業です」と言っても関係ない。重要なのはコミュニケーション能力なんですよ。でも、そういうことは卓球選手は学生時代にみんなやっていたはず。場の空気を読むとか、相手の心理を読むことはね。今相手はこう言ったから、相手はこれを欲しているから、こう言えばいいんだなというのは卓球で鍛えられている。「読みと待ち」が卓球でも仕事でも重要。卓球なんて相手がボールを打って、バウンドする前に動き出したり、振り出しているわけだから。

たとえば優秀な人を選ぶ評価制度は、日本代表を選ぶプロセスに投影させた。そうすると、だから俺、選ばれなかったんだとストンと理解できる。

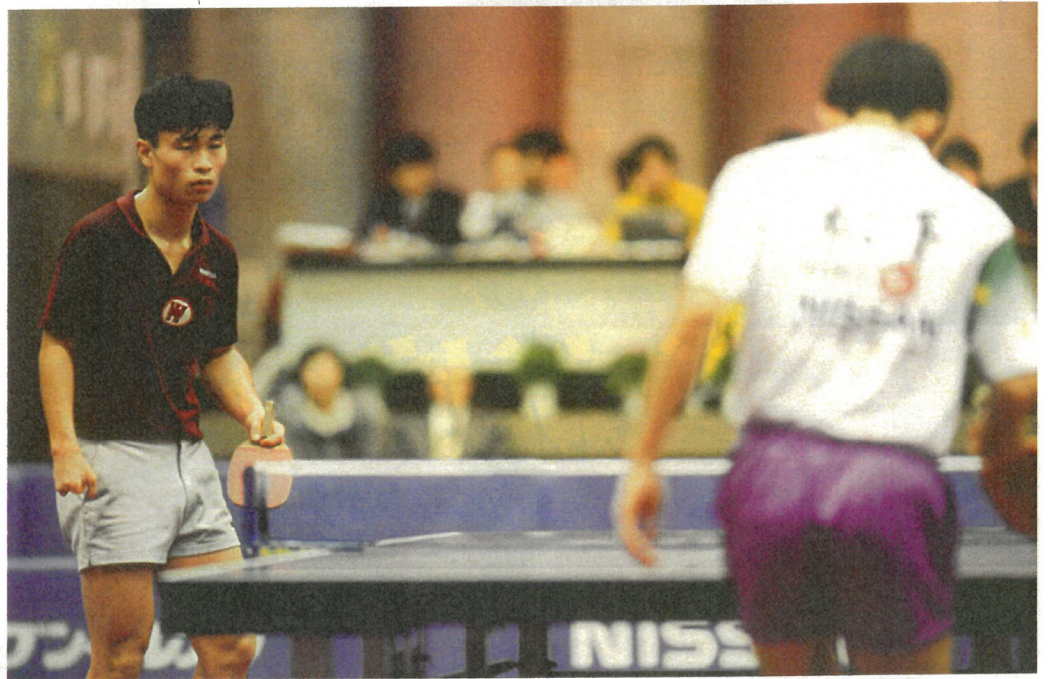
2位が多かったのは
注目されることを避けたから。
心のブレーキがかかっていた

糞谷の戦績を調べるとシングルスでもダブルスでも全国2位、3位が多い。それはなぜだったのか。

1位と2位の差はなんだろうとずっと考えていた。他人のために頑張る時が一番パワーが出ると思う。家族とか子どもができる選手としても頑張れる。

(松下)浩二さん(世界メダリスト)がプロデビューした全日本決勝で、ぼくは負けた。浩二さんは背負うものがあって、そのために頑張ろうと思っていたのではないかと、ぼくはあの決勝では、自分を応援

して、ぼくはあの決勝では、自分を応援



してくれている親のためとか、観客に良いプレーを見せようという思いがなくて、「おれがおれが」だった。誰かのために頑張ろうと思える自分の限界を越えていくけれど、卓球をやっている時にはそれがわからなかった。

●1993年の全日本選手権男子シングルス決勝で松下浩二(手前)と対戦した糞谷。「背負うものがあつた松下浩二」と「おれがおれがの糞谷博和」の間には勝者と敗者の線が引かれた

右手に障がいを持っていると、同じステージに行くために普通の選手よりは工夫している。学んだ量も違う。コツコツ努力するしかなかった。でもそれが社会人になったら非常に役に立っている。

ぼくが全国で2位が多かったのは、おそらく自分でブレーキをかけていたからなんです。全日本ジュニアで3位になって卓球レポートで取り上げられて、田中先生が「活躍して障がいの人のために……」と話をしている、なんでおれが障がいの者のお手本にならなきゃいけないんだ、と思った。コンプレックスを抱え、そのお手本になることを背負えなかった。

右手が悪いことをクローズアップされるのが嫌だった。大学生までの写真を見ると、右手を隠して写真に映っている。完全に吹っ切ったのはこの数年だけで、当時は優勝してマスコミが寄ってくるのも嫌だった。優勝すると右手のことがクローズアップされるからと、自分の中で知らないうちにブレーキをかけていたけど、今はそういう気負いがありませんね。

銀行に入った時に、周りの同期入社は優秀と言われる大学から来た人たちだったけど、しゃべっている話聞いてきて、彼らの考え方が浅い、というか知らないんだなとわかった。みんな目標設定とか努力の仕方を知らないなど。まだ仕事もしていないのに、「おれ出世するな」とわかった(笑)。こっちはチャンピオンスポーツをやっているから応用できるんですよ。上宮でも小さな目標、大きな目標を部屋に貼っていたけど、それも仕事で応用できる。

ぼく自身、卓球をやっている時には不安でしかなかった。だから、卓球の現役選手に言いたい。あなたが思っている以上に、厳しい卓球での生活が将来の人生に必ず活きます、と。